留置期間 安全性に影響せず

札幌白石記念

経鼻胃経管栄養カテーテル検証

白石区の札幌白石記念病院（野中雅理事長、宮田節也院長・103床）看護部は、経鼻胃経管栄養法におけるカテーテル交換時期を検証。医療機関が一般的に定めている留置期間であれば、カテーテルの劣化等はみられず、安全に使用できることが明らかになった。

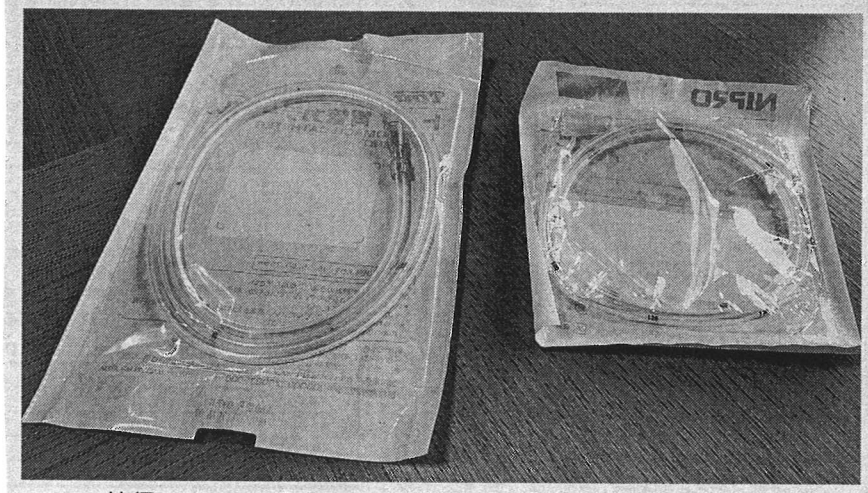
脳神経外科疾患の診療を主体とする同病院は、入院患者の8割が脳卒中の後遺症として多様な障害を抱えている。嚥下障害や意識障害のある患者には経鼻胃経管栄養法を取り入れ、2週間毎に看護師が胃管カテーテルを交換している。

挿入時は苦痛を伴うことが多く、意識障害の患者は看護師の手を噛んだり、抵抗して鼻から出血するケースもある。挿入後には、医師が確実に胃に入っているかをレントゲンで確認する必要があるなど、患者と医療者双方の負担が大きい。

交換期間は医療機関によって2～4週間とさまざまで、推奨する基準はNST学会も特に示していない。そこで、2020年5月～10月に、入院していた患者15人を5人ずつのグループに分け、それぞれのカテーテル留置期間を2週間、3週間、4週間に設定。抜去したカテーテル先端部の細菌繁殖、変質の有無を、期間別に観察・調査した。

培養検査では、全ての患者から数種類の細菌が検出されたが、いずれも身体に影響がない常在菌のみで、挿入期間の長さとの因果関係は低いことが判明。先端部は胃の形状に沿って曲がる変形や硬化、変色が確認されたものの、再挿入が必要となる閉塞や腐敗、変質はみられず、どの期間も比較的安全に使用できることが明らかになった。

加藤奈津美看護師は、「交換時期を伸ばすことで患者の負担を軽減してあげたい。4週間でも支障がないことが分かった意義は大きい」としており、挿入時の手技の違いやカテーテルの種類など、他の要因も考慮しつつ、適切な交換期間を定めていく考えだ。



外径4.0mmと5.3mmの胃管カテーテルを使用している